

UDLM

9

vol.310

September 30th
2021

衆力功をなす

- p.2-5 特集 /PJ の概要と意義
- p.6-8 先生方インタビュー
- p.9 夏修了生からのメッセージ

プロジェクトという活動の在り方 大学がまちづくりに参入する意義

都市デザイン研究室の特徴の一つに、研究と並列してプロジェクトという活動に参加することが挙げられる。これは大学が知の実践者として実際のまちづくりの現場に参加することであるが、都市デザイン研究室は発足以来、50 以上のまちにおいて PJ としてまちづくりを実践してきた。

今月号では、大学という立場からまちづくりを行う意義を特集する。前半ではその前座として現在のプロジェクトの軌跡を振り返る。次ページでは、各 PJ の運営体制と概要を紹介するとともに、既に大学を離れ各々の道を歩

んでいる OBOG に参加した PJ を振り返っていただいた。現在 PJ に参加している学生にとっても改めてその意義を振り返る機会としていただきたい。同時に、他の OBOG にとっても考えるきっかけとなれば幸いである。

後半では、先生方に同テーマについてインタビューを行った。意義だけでなく、PJ を包括する立場としてどのような考えをお持ちかも伺った。

これらを通じて、大学によるまちづくりの意義、大学の立場でしかできないことを明らかにしていく。



み みなかみプロジェクトの活動

上 上野プロジェクトの活動

富 富士吉田プロジェクトの活動

宇 宇治プロジェクトの活動

手 手賀沼プロジェクトの活動

運営体制からみるプロジェクトの特徴 OBOG が振り返るその意義

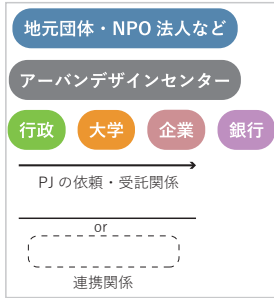
先月号ではみなかみプロジェクトの、不動産ディベロッパーや銀行と連携する特徴的な運営体制から、「プロジェクトのカタチ」として、各プロジェクトの全体像を比較した。

今月号ではそれらをさらに拡張し、運営体制に加えて概要、OBOG が振り返るプロジェクトの意義を一覧にした。

「まちづくりの実践」を標榜する研究室たる都市デザイン研究室のまちへの関わり方・巻き込まれ方は、単に一研究室の実践活動のあり方を示すのみならず、まちづくりそのもののあり方を示すものとしても一つの示唆になるのではないかと考えている。

読者諸氏が各々の興味関心のある点を比較し、各プロジェクトの設立経緯、運営体制、その意義と、それぞれの共通点や違い、特徴を見出しただければ幸いである。

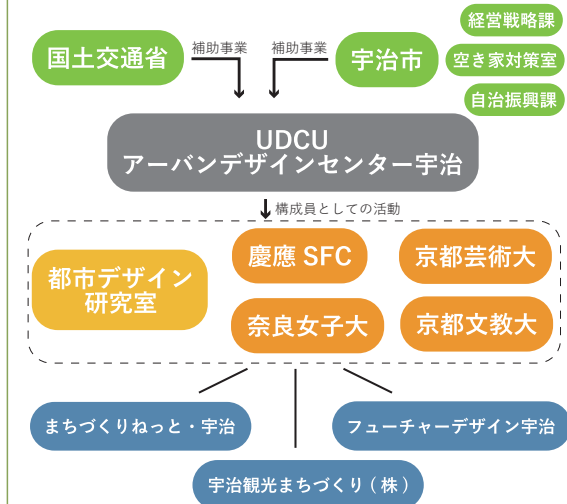
PJ 名



プロジェクト概要

OBOG が振り返る プロジェクトの意義

宇治 PJ



プロジェクト概要

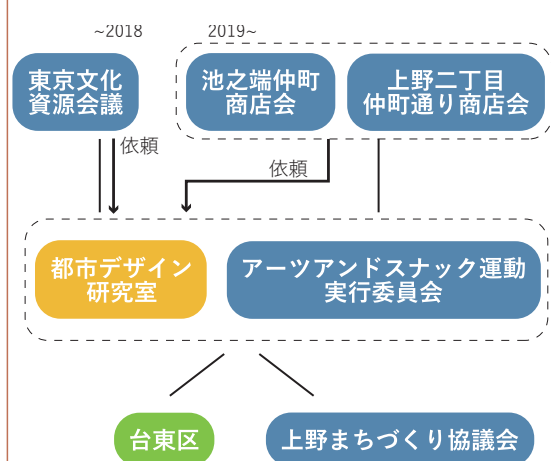
宇治市の中でも特に有名な観光地である「中宇治」地域において、観光地としてのブランドを居住地としてのクオリティに転換していくことを目標としてまちづくりを行っている。

昨年度より開始したプロジェクトである。東京大学、奈良女子大学、慶応 SFC、京大文科大学、京都芸術大学の学生および教職員、地元の方々が、アーバンデザインセンター宇治（UDCU）を共通のプラットフォームとして、国交省および宇治市から委託された事業に対し、協働して取り組んでいる。これまでにいくつかの敷地における具体的な設計提案、現地での子どもワークショップ、空き家実測調査などの即地的な取り組みを行ってきた。（M1 杉本）

OBOG が振り返る、プロジェクトの意義

大学という立場からまちづくりに関わることの意義は、**比較的自由で独立した立場から、純粋にまちづくりに関われるという点**にあるのではないかと思います。あくまで仕事として、依頼者の期待に応えることが社会人に求められるアウトプットであるのに対して、ビジネス的にもしがらみ的にも、そして時間的にもより制約なく、やりたいことをやれるのが大学、特に大学生という立場ではないでしょうか（もちろん、学生が責任なく好き放題やれるなんていうこともないとは思いますが）。特に宇治 PJ は、宮城先生が地元の方でもあるという点でさらに自由にやりやすい PJ なのではないかなと勝手に思っています。なので個人的には、PJ でやりたいまちづくりを少しエゴイスティックに考えて提案してみてもよかったかもな、ということを反省しながら社会人生活に動しむ今日の頃です。（2021 卒 沼田）

上野 PJ



プロジェクト概要

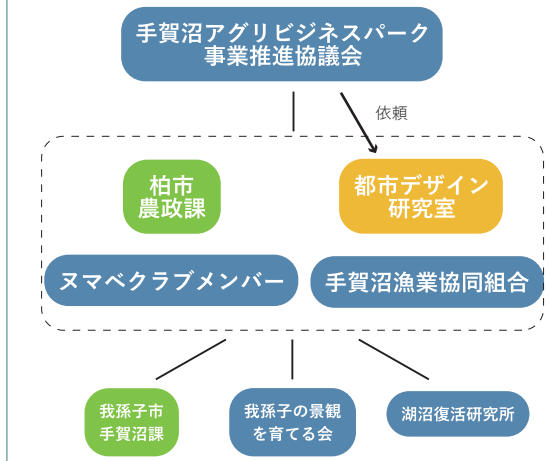
2017 年度、東京文化資源会議の「上野スクエア構想」に関わる形で始動したが、2019 年度以降、地元商店会からの依頼を受け「アーツ & スナック運動実行委員会」を結成し、よりミクロな視点でのまちづくりに携わっている。現在対象としている池之端仲町通りとその周辺は文化的な歓楽街であり、スナックやソーシャルビルなど特徴的な空間が残る一方、風俗店の流入等治安の悪化が懸念されている。まちに存在する多様な空きスペースに着目し、イベントや勉強会を開催しながら地元の方々の巻き込み、スナックを使ったアーティストの活動の場の提供、家族や女性も安心して過ごせる街路を取り戻す「ガイトウスタンド」の提案、屋上を使ったホップの栽培、不忍通りの再編提案など小さなアクションの積み重ねを重要視している。（M2 河崎）

OBOG が振り返る、プロジェクトの意義

まず、社会人の労力は「給与」という絶対的なものによって担保されるのに対し、学生が関わるプロジェクト活動において労力の原動力となるのは、各々の能動的な「関心」や「責任感」となります。それは一方で脆弱でありながらも、**大きなしがらみや損得勘定に囚われない環境下で活動できていたのは幸いで、かつ地域の方の信頼を掴みやすい点では大きな意義**でもあったのかなと感じています。

上野 PJ で大きな手応えを感じたのは「ガイトウスタンド」でした。設計・制作、法制度との整合性の検討、運営管理の検討、行政協議、社会実験の企画・実施といった「総合プロデュース」に加え、調査を踏まえたブックレットの発行や都市計画報告集への投稿という形で即時的に成果の「蓄積」「発信」を行ったことに、1 つ大学が関わる意義を見出せたのではないかと考えています。（2021 卒 西野）

手賀沼 PJ



プロジェクト概要

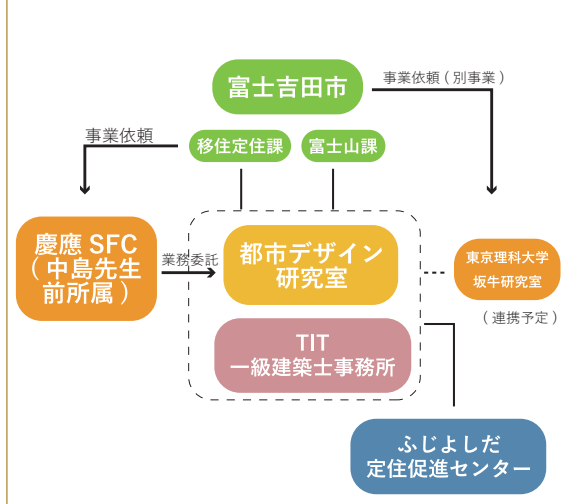
手賀沼の水際環境を「ヌマベ」と呼び、本物の自然に触れられるエコロジカルパブリックスペースとして、公共・民間・学識・漁協で連携して育てることに取り組んでいる。永野先生が手賀沼アグリビジネスパーク推進協議会より依頼を受けたことで 2016 年よりプロジェクトが開始した。これまでに手賀沼フィッシングセンターの改修デザインや、ヌマベの可能性を広げる社会実験など、フィールドデザインとアクションを往復することでより良い場へとアップデートしてきた。さらに活動から見えてきたことをもとに将来ビジョンを提示し、活動とともに更新し続けている。昨年度はヌマベを拠点に活動する団体同士を繋ぐ組織の立ち上げ支援や、マスターコンセプトブックの作成を行った。（M2 谷本）

OBOG が振り返る、プロジェクトの意義

手賀沼 PJ での活動を改めて振り返ると、研究室だから特別にというものはそれ程ないのではないかと思います。民間コンサルタントとしてまちづくりに携わる会社に入って感じるのは、あるエリア・空間をより良くすることにおいて考えるべきことは、立場は違っても研究室 PJ と同じであるということで、その思考法の基礎を PJ 活動で培うことが出来たと思います。

ただし、やはり立場の違いはあるのではないのでしょうか。**自分がその街、エリア、空間に対して一生懸命考えたことを地域の方々や行政の方々など、多くの関係者に「直球で」伝えることが出来るのは、研究室活動の特権**かもしれません。そうした機会をデザ研の学生は自分たちで掴むことが出来るという所に大学の立場からまちづくりに関わることの意義が隠れている気がします。社会に出て、変化球に頼らない「直球勝負」をしなければという自戒を込めて。（2021 卒 松本）

富士吉田 PJ



プロジェクト概要

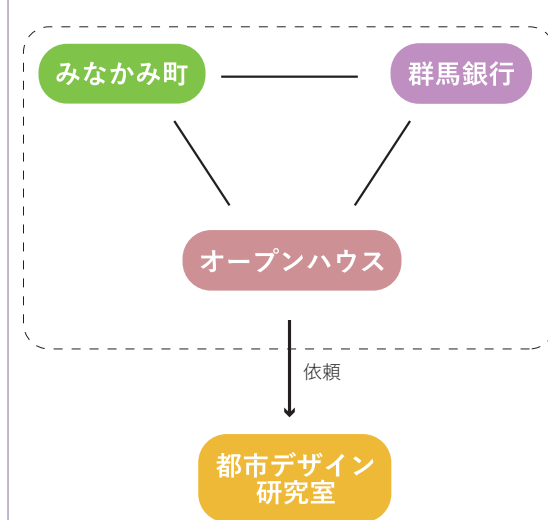
中島直人先生が慶應義塾大学 SFC 研究所に所属していた頃から続き、現在は富士吉田市と慶應義塾大学 SFC 研究所、田中大朗建築都市設計事務所、都市デザイン研究室の 4 者が協働して取り組んでいる。今年度より対象地が移り、下吉田で新たな活動が始まった。下吉田には桜や紅葉の時期に国内外から観光客が集まる新倉山浅間公園の忠霊塔があり、時期集中的に来街者が押し寄せることによる交通渋滞や、忠霊塔単体での観光による周辺回遊性の低さなどの課題を抱える。これらを解決すべく、地域資源の掘り起こしや道路調査から観光動線を検討し、提案を行う。今年度の活動として秋に社会実験や地元の方への成果発表会及び展示会を予定しており、今後東京理科大学や地元のプレイヤーとも積極的に連携しながら、活動をさらに展開していく。（M1 神谷）

OBOG が振り返る、プロジェクトの意義

大学としてまちづくりに携わる強みは、**人が見えるスケールの中長期的なビジョンを描き発信**することではないでしょうか。半年間働いてみて、「それ誰がお金出すの」が常に付きまとうこと、合意の取れていない内容の発信が恐れられることを実感しています。その結果、広域の超長期的なビジョンと、合意が取れた内容を示す超短期的なビジョンは発信されるけれど、その間が抜け落ちているなど感じます。

富士吉田 PJ では、地区スケールの将来ビジョンを発信しました。「これは〇〇研究室で検討した内容であり、決定事項ではありません。」というクレジットが使える立場って便利です。しかし、それが描きっぱなしのものになってしまった感があります。大学という地域に対してフラットな立場を利用して、大人たちを巻き込んでいけるとよかったです、なかなか難しかったですね。（2021 卒 宗野）

みなかみ PJ



プロジェクト概要

今年度より開始したプロジェクトである。みなかみ町中心街、ふれあい通りの活性化とみなかみ町全体の観光計画の策定を目的とし、2021 年 9 月に東京大学、みなかみ町、オープンハウス、群馬銀行の四者で包括連携協定を締結した。経営が悪化した温泉街やレジャー施設の立て直しをオープンハウス社が図り、都市デザイン研究室は全体計画の作成、空間の利活用方法やデザイン提言に取り組む。群馬銀行は資金面での援助や助言、といった役割を担う。2021 年度は全体計画の策定、2022 年度にはオープンハウスが取得した中心街の敷地にて社会実験を計画しており、官民学金の四者による包括的な取り組みとなっている。来年度には市民参加のワークショップも計画される予定である。

（M1 合田）

プロジェクトの意義

官民金だけによるまちづくりを行おうとすると、意図せざるとも枠組み上、民間の利益に対する意識が強まってしまう、連携が円滑にならない場合も少なからずあるように思います。そこに大学という公的機関が入ることで、**客観的な公益性が出るのみならず、地元の人にも協力的になっていだける**ということがあるように思います。四者それぞれが強みを生かし、まちづくりを行っていく際の潤滑油のような存在になればと思います。都市デザイン研究室としては、その枠組みを活かしつつ、今まで研究室として培ってきたノウハウを活かしながらみなかみ町にしかない資源を掘り出し、町の再生を手助けする提案へとつなげていきたいです。（M1 合田）

※今年度から始まった PJ であり、OBOG がいないため、現メンバーからの視点として執筆した。

大学だからこそできること 先生インタビュー

自分たちが都市に対して向き合ってきた成果であり、そして修士課程での多くの時間を費やすプロジェクトである。何かしらの意味があったかと思いたい。だが、その「意味」はどうやって見出すことができるのか。先生はどん



各PJの特徴

合田：本日は「大学が町に携わる意義」ということでインタビューしていきたいと思います。自分自身がPJに入り半年経つ中で、考えてみたいと思ったことでもあります。早速ですが、まずはそれぞれのPJの特徴を伺ってみたいと思います。いかがでしょうか。

永野：まずは手賀沼について。他のPJとの相対的な違いで言う**と基本計画、基本設計の設計者という立場から入らせて頂いた**ことが特徴です。手賀沼フィッシングセンターの整備という具体的な整備事業がありました。そこから大学という立場を活かして設計した空間のソフト面を演出したり、社会実験的に変えてみたり、地元の人とマネジメントをしたりという活動を展開しています。

合：具体的な設計も行っていたのですね。ソフトな方向も丁寧に行うのはデザ研の特徴と言えるのでしょうか。

永野：設計だけで終わらせない、というのは大学に限らず設計者としてのあるべき姿かなと僕自身は思っていますが、実務にいとなかなかできないことです。学生のみなさんがやってみたいと言ってくれる限りは取り組んでいけるので、地元の人と一緒に頑張っています。手賀沼は環境問題もあって地元のプレイヤーが盛んであることも幸いしています。



▲手賀沼フィッシングセンター

中島：続いて富士吉田についてお話しします。これは少し特殊なPJで、もともとは地域の課題解決に大学の知で貢献すると同時に、地域を大学の教育フィールドとして活用するという相互の利益・目的のもとで、2007年に富士吉田市と慶應義塾大学SFCが連結協定を結びました。その後様々な専門の先生が携わっていく中で、私たちの富士吉田PJもこの協定に基づくひと

な価値をプロジェクトに見出しているのか。インタビューを通じて先生のまちづくりへの向き合い方を伺うことで、学生がプロジェクトに参画する意義を問い直すきっかけとする。

インタビューー

宮城俊作：都市デザイン研究室教授

中島直人：都市デザイン研究室准教授

永野真義：都市デザイン研究室助教

聞き手

合田智揮（マガジン編集部）

つのPJとして位置づけられています。私がSFCにいた頃から続いていて、今年度からは3つめのテーマに取り組んでいます。

特徴は、発注する行政としてもはっきりとした政策がまだ見えていないものの、その前段階として**行政として今後なにをやっていけばいいのかといったところから大学側と一緒に考える**、あるいは地域の人を巻き込みながら考える、ということでしょうか。大学の学生がまちに入っていくことでいろいろなまく進むということがありますね。

一緒に取り組んでいるTITというのは研究室で一学年下だった田中大朗さんたちがやっている事務所で、また富士吉田定住促進センターは慶應義塾大学の提案でたちあがったものです。昨年までの4年間に行っていた道路拡幅後のまちづくりの検討では、地元の方と我々がつながり、結果として地元の方に空き家を提供していただきそちらをリノベーションするということもありました。



▲空き家をリノベした横町ポスト

合田：みなかみPJはどうでしょうか。

永野：きっかけとしては私の社会人時代の同期から声をかけていただき始めたばかりのPJで、この9月に包括連携協定を結び、先に座組をつくってから始める形です。オープンハウスさん、群馬銀行さんがパブリックマインドをもって中心温泉街の再生に乗り出す上で、**継続的なまちづくりを保証する産官学金の体制**がまず欲しいということだと思います。我々としては客観性をもって頑張っていけないと事業の波に飲み込まれてしまうので、がんばっていききたいところですね。

合田：波に飲み込まれる、とはどういう状況でしょうか？

永野：大学と実際の社会のスピード感は全く違うと思っています。大学はと

てもものきなスピードです。一方ビジネスのスピードはすごく速くて、大学の提案などが遅くなると、反映できないといったことがあるかと思います。先に手を打っていきけるような取り組みを大学がしていけないと、やりたかったこと、やるべきこともできなくなってしまうといったことがあるかと思います。宮城先生は進行形で実務をなされているのでまた違った感想をお持ちかもしれません。ただ最近では自分も大学のスピードに慣れてきてしまっているなあと痛感している次第ですので、自戒を込めてですね。



▲9月に記者会見が行われた産官学金包括連携協定

合田：その点については宮城先生、いかがでしょうか。

宮城：宇治PJは、まちづくりのエリアプラットフォームをつくらうという気運が4年くらい前から地元で盛り上がっていて、それにアクセルを駆けるべくUDCUというかたちを提案したことがはじまりです。当時、私自身が東大に異動することが決まっていた時期でした。

スピード感が重要だと考えたこともあり、構想を立ち上げてから1年でセンターとなる建物も改修し、地元の大学や私が在職していた奈良女子大学も関わっていきました。奈良女子大の教員が3人参加しているのですが、全員が自分の設計事務所を持っています。京都文教大の森正美さんもまちづくりをすすめるための組織を持っていて、京都芸大の城戸崎先生も自分の事務所を持っており、組織そのものにとても機動力があります。例えば、今年は経済産業省の事業再構築補助金の申請する地元の中小企業を支援していますが、その企業の建物の実測を奈良女子大の学生が行い、加藤亜矢子先生と根本先生が設計をするのですが、それをUDCU（アーバンデザインセンター宇治）というプラットフォームでコーディネートしているという状態です。それ以外に宇治市と国土交通省からの補助金と委託事業を1年目から受けていて、それをテコにUDCUが一般社団法人になったのは今年の4月からですね。

宇治PJは、もちろん大学の研究室の参加によるものですが、基本的にはこれは、地元市民の一人である私個人の課題でもあります。寺院と街の関係は、中宇治地域の場合はとても大事なのですが、その関係がやや疎遠になっていた期間が長く続いていました。そこで、オーバーツーリズムの問題と新型コロナウイルスの影響を考えることを契機に、インバウンドがもたらした贅肉を削ぎ落とし、**住環境再生の観点から宇治のまちづくり**を考えようという動きが共有されています。来年からは、UDCUが都市再生推進法人の指定を受ける計画なので、そうすると地元との関係がより緊密になっていくんじゃないかと期待しています。

次のテーマとも関係しますが、事業としてみればスピード感としくみが重要でしょう。それからアカデミックに関わる以上は継続性も大事です。みなかみの包括連携協定も同じですが、長期的な課題に対しては、活動を継続するためのプラットフォームも必要で、そこにうまく学生が入り込んでいろいろな経験をするのが効果的だと思います。

合田：人的リソース、金銭的リソースが上手に回ること、大学がまちを離れたあともまちづくりが回ることはPJの継続性という点では重要と感じています。宮城先生は特にその点を重視している印象を受けました。



▲UDC（アーバンデザインセンター）宇治

宮城：UDCUには、地元の民間事業者、NPO法人、市民団体、まちづくり会社、商工会議所、地元金融機関とMINTO機構がつくったファンドの資金も入っています。事業としての持続可能なしくみをつくろうとしていますので、**事業化された活動に学生がプレーヤーとして関与しつつ、アカデミックな課題としてとらえられるところを抽出する**というのがポイントかなと思っています。

合田：ありがとうございます。プラットフォームを作ることで属人性を下げ、まちづくりがまわる土台をつくっているということですね。最後に上野PJについてはどうでしょうか？

中島：上野の始まり方も独特です。東京文化資源会議というまちの文化に詳しい人の集まりが、東京のいろんな地域での文化資源をいかしたまちづくりをつなげていこうということで上野でも検討を始めていました。地元の人を巻き込んだ話し合いの場をつくる段階で、私たちにも声がかかったのです。はじめは地元の一部の方と検討するのみでしたが、次のフェーズで、描いた絵を実践したいということで、たまたま委員会の中に池之端仲町の商店会の方がいて、自分のまちでもぜひということになって、地域密着の取り組みがはじまったという形です。

上野は大学のすぐ近くということもあり研究室としてのコミットも強いですが、やはり主体は地元の方です。眼前の課題を解決し、新しい価値を見出す取り組みを続けていける体制づくりを支援している、ということだと思っています。

永野：上野は地元と思っていますし、大学と地元の関係という意味でも大事なかなと思いますので、なるべく足繁く通うことをより大事にしています。**大学生生活とまちづくりが一体となったような状態を目指している**というところが特徴かなと思います。

中島：本郷PJや谷中も同じですね、我々がやらねばならないという使命感がありますね。



▲地元の人と育てている屋上ホップ（上野PJ）

PJの事業性

合田：続いて、それぞれのPJの事業性について伺いたいと思います。事業性というのは、先ほどのお話にも少しありましたが、人的・金銭的リソースの回り方、あるいは、都市デザイン研究室に関わる前と後におけるまちづくりのありかた、という2点を大きく指しています。このあたりに関しては、今までの話を伺う中で、それぞれの先生ごとに特徴が出ている気がしました。そのあたりについて、それぞれの先生はどのように捉えていますでしょうか。

中島：後者の観点から捉えるならば、基本的に**地域の方々が主体的に進めていけるところにランディング**することがやはり大事です。過去の様々なPJをみてみると、我々が積極的に組織づくりに関わる場合もあれば、地域の方々が自らNPOをつくる場合もあります。例えば荏ノ浦はまさに地元の方がNPOをつくっていったケースだったのですが、大学と一緒に活動しながら、次第にまちづくりの主体が育っていく、という形がひとつあるんじゃないかな、と思っています。

あとは、PJの観点として、地域の複雑な状況の中で大学の役割を明確にしないといけない、というのはもちろんあるのですが、**PJのシンプルな原点は学生が地域で役に立ちたい、課題を見つけたら自分でとびこんでいくこと**、大きな体制作りは難しいけれども調査をして地元の人たちに自分たちの関心を伝えて、PJという形でつくりあげていく、というのがまずあると思っています。はじめから座組が用意されているとかではなく、ただ学生の機動力や情熱で地域に飛び込んでいく、ということが西村先生の時代からあったとおもいますし、それは今でも変わってないんじゃないかと思えます。座組は座組ですが、もう少し純粹に、地域に飛び込むというものあるのかなと思います。

合田：そういった意味合いもあったのですね。自分が渦中にいると気づきにくい部分でもあると思いました。永野先生は意識されていることなどありますでしょうか。

永野：私たちは地域で活動させていただく、学ばせていただく立場であって、あまり大学のPJそのものが事業的に回らないといけない、ということは考えたことはありません。地元で暮らしている方など、地域の主体が回していればいいと思っています。その人たちが気づいてない視点を提示するとか、そういうところに学が入る形・意義はあると思っています。

エリアマネジメントなど持続的に地域を回していく主体が事業性を持つことは大事ですが、その組織も自分たちで完結していることはほぼなくて、企業のパブリックマインドに拠っていたり、自治体からのサポートに拠っている部分はあるので、そういったパブリックマインドを共有するための調査・アクションを担うということが大事だと思っています。

PJに参加する学生に向けて

合田：最後に、PJに参加した／している／しようとしている学生に一言お願いします。

宮城：事業の持続性の話題に立ち戻りますが、それは大学が関与することの持続性というよりも、大学が参加するプラットフォームにおいて事業性が担保されていることが重要ではないかと思います。UDCUを地元の方々や行政と一緒につくってきた背景には、そのような考えがあります。UDCUは、自走できるしくみをめざしていますが、そのためには、まちづくりに関する民間事業のコーディネーションや設計事務所を持つ大学教員が業務を行う場合は、地元市民との協働をはじめとするプロジェクトマネジメントを担当するようにしています。これは私も含めた関係者のノウハウが反映されていることが大きいでしょう。

その中で大学の参加による意義というのは、**知を体現するだけでなく、何らかの形でそれらを還元する、その相互のやりとりの中でまちづくりそのものがどのように動いているのかを当事者、プレイヤーとして実体験してもらうこと**、それが最も重要だと思っています。かつては、デザインサーヴェイを大学の学生と教員が様々なフィールドで行っていましたが、そこではアカデミックな動機がありました。しかし、それ以上に「学」の立場でないことを発信できない内容があったわけです。街並みの保存運動はその典型です

ね。しかし、今の時代は、新しい価値観を含めてもっとアクティブに関わっていける時代だと思います。開発と保全の対立の構図を越えた関わり方が提供できる時代なのではないでしょうか。都市と地方、都心と郊外といった違いも、体験していただければと思います。

永野：いろいろあって難しいですが、大きく2つあると思っています。

1つはさきほど宮城先生がおっしゃった、プレイヤーとして関わり、地域の実態を実感する体験はやはり貴重です。地域の実態は都市・地方で大きく異なるので、PJは2つやったほうがいいよ、と窪田先生に言われたことを思い出します。

一方で、プロジェクト報告会などでも言ったりするのですが、まちな関わるというのは責任が大きいなと思っていて、新しいまちな関わる時には怖さが常にあります。外の人間がかかわるということは、無責任に見えるときもあるし、実際に負の遺産を残す可能性すらあります。どんどん飛び込んでほしい一方で、謙虚な関わり方をしてほしいですね。

あとは、謙虚さのひとつの態度として、**時にまちづくりを立ち止まらせること、本当にそれでよいのかしっかり考えなおすこと**を大事にしたいなと思っています。結論を急ぎすぎないということです。先ほどのスピード感の話とは矛盾しますが、ゆっくり本質に迫るプロセスを大事にしてほしいですし、本質を知るためにはまちのことをリサーチする必要がありますし、他の事例を知らなきゃいけないし、本音同士で話し合う学生の関係性が大事だと思います。

中島：大学にずっというると、論文を書いたり研究をしていますが、それが世の中に役立つはずだと信じてはいるけれども、直接的にはそれが見えにくい中で、地域に飛び込むと役に立つ、あるいは立たないということも、リアルに見えるというのが大事なところですよ。

あとはやはり、宮城先生と同じですが、まちづくりにはどういう人がいてどういう関わり方があるのか、大学にただだとかわかりにくい部分があります。行政という立場も大きく、良いPJにはだいたい行政に力強いロールモデルがいる時が多いです。そこに専門性を持った人たち、我々もそうと信じていますが、が入ってきます。修士の早い段階でそういう方々の仕事に触れていくと、進路もいろいろ自由に考えられるのではないのでしょうか。自分の未来を広げる手段として関わってほしいですね。

そして大学の役割としては、**個々のローカルな課題が、どういう大きな問題につながっているのだろうか、今の世の中のどういう社会課題に对应しているんだろうか、という位置づけを行う**ようにしたいです。これは地域の人にとってはそんなに重要なことではないかもしれませんが、大学側は地域課題をある種のケースとして捉えることも大事なのではないかと思います。世の中の大きな動きをしっかりと見据えて、地域で得た知見を、他に広げていくというのは大学の大きな役割だと思います。

あとは、まちに飛び込んでみると、学ぶことや嬉しく思えることがたくさんある反面、怒られることも力不足を痛感すること、無責任になりうることも多々ありますが、後で振り返ってみれば全て大きな財産です。まちの方々とつながりは何年たっても覚えてくれたりしているもので、自分が少しは関わったんだな、携わってよかったな、と思うことはあります。修士での付き合いが一生涯のものになると思って、やってくれたらと思います。

宮城：最初は余計なおせっかいに受け取られることってままあるわけ。でも、明らかに外の視点が重要なことってみんなすぐにわかるし、地元が気づいていないことってたくさんある。一種のブレイクスルーをつくる役割という意味でも、大学、学生の役割としてはあると思いますね。

合田：地元のまちづくりをしている宮城先生だからこそその発言なのかなとも思いました。先生方、本日はありがとうございました。

インタビューを終えて

インタビュー前の自分は少し頭でっかちだったかもしれない。頭だけでなく手を動かし足を動かす、もっと「まちに飛び込む」ことで、大学のあるべき姿はより実感できるのかもしれない、と感じた。一方で、まちづくりは長期にわたるもので、緩やかにしかしなやかに変化するもので、だからこそ手のかけがいがあるというものかもしれないが、ともすれば自己満足に陥りかねない点には、忘れないように時々釘を刺すようにしたい。

研究と実践の振り返り～夏修了生からのメッセージ

公立文化施設におけるサービスデザインの展開プロセスに関する研究

- 大阪府立江之子島文化芸術創造センターを対象としたケーススタディ -

	
園部 達理 SONOBE Tatsuri	
対象地 大阪府立江之子島文化芸術創造センター・木津川遊歩空間（トコトコダンダン）	研究の概要 自治体設置の公立文化施設に対して、サービスデザインのフレームワークを適用し、ケーススタディを通して地域ニーズが発掘され、実際に反映される展開プロセスを記述を試みた。
キーワード 公立文化施設、サービスデザイン、文化行政、地域資源、住民ニーズ	研究の目的 ①公立文化施設を中心とした「場」において、地域問題の解決に寄与するプロセス ②そういった特色を持つ施設と地域（行政・住民）との相互関係の実態を明らかにすること。

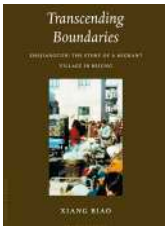
愛媛県内子町における「農村のおもてなし空間」の創出と運営

1970年代以降のまちづくりを通じた行政関与に着目して

	
岡山 紘明 OKAYAMA Hiroaki	
対象地 愛媛県内子町	研究の概要 内子町の町並み保存が本格化した1970年代からのまちづくりを行政が関与した範囲で、3つの時代に分け、農村のおもてなし空間の観点から10の空間の特徴を明らかにした。
キーワード おもてなし空間、内子町、町並み保存、村並み保存	研究の目的 愛媛県内子町を対象に1970年から2021年現在までの行政が関与した「農村のおもてなし空間」を創造と運営の観点から明らかにする。

COLUMN

BOOK OF THE MONTH



Transcending Boundaries: Zhejiangcun: The Story of a Migrant Village in Beijing
Xiao Xiang
Brill
2014

推薦者
M2 CHEN

The book sheds new light on the relationship between Chinese city, migrant community, economy and society in times of transformation. It vividly documents the daily life of the biggest migrant community in Beijing, Zhejiangcun, located only 5 km south of Tian'anmen.

WEB MAGAZINE

続きは都市デザイン研究室 HP で！

<https://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ia/blog/>



新宿区景観 WG 最終報告会

9/6に新宿区景観ワーキングの最終報告会が行われました。数ヶ月に渡るサーヴェイ・議論の成果として作成した改訂案をチームごとに発表し、都市デザインの先生方からコメントをいただきました。(M2 鈴木)

小高 PJ 現地発表

東日本大震災からの復興を振り返る企画「10年目の小高」で、小高復興デザインセンターの活動について発表し、地域でまちづくり活動に関わる方々とのディスカッションを行いました。(M2 植田)

修士研究を終えて

思い返せば、卒業研究でアートイベントを契機とした地域社会と都市空間の変化の研究に取り組み、マネジメントの視点や運営主体のファシリテーターとしての関わり方の必要性を強く感じたことを出発点に、学芸員実習の経験も加わる形で修士研究の土台が出来上がったと思います。都市デザインのディシプリンと共通する、何を価値と捉え、どう後世に伝えるかという点が一つの軸として存在していました。緻密な研究とは言えませんが、今の自分の関心をしっかりと反映してまとまった形にすることができたと思います。先生方、研究室のみなさま、ありがとうございました。

実践を振り返って

ディレクションやキュレーションの現場で動き回る機会を幾度かいただきました。中でも、大規模再開発のパブリックアートの案件で、デベロッパー側ではない主体として参加し、地域の未来やそこで過ごす人々の生活と真摯に向き合う経験ができたのは印象的でした。出来上がった空間が今後どのように使われていくのが楽しみです。

修士研究を終えて

2017年に入学して4年半が経って、なんとか修了できました。ひとえに甘やかしてくれ、尽力してくださった、先生方への感謝が大きいです。特に岡田文淑さんには感謝を申し上げたいです。古い街並みは残っているのではなく、意図的に残すものであり、運動論なのだとすることを、たくさんの言葉で教えていただきました。地方が輝きを取り戻すヒントになる取り組みを内子町は約半世紀に渡り行ってきました。そのヒントを少しでも掬い上げられたらよかったかなと思います。また内子でゼミの皆さんとまちづくりの議論ができる日を楽しみにしています。

実践を振り返って

研究は唯一のことをやることにこだわり、かつ読み手を説得しなければいけません。田舎の町に入って実践するときも、他でやっていないことをやる視点を持つことは大切で、実現のためには、話したり、挨拶を重ねたり、企画書を書いたりして、説得していきます。「唯一の視点」と「説得」という観点で実践と論文は似ているなと思いました。

POSTSCRIPT

PJに携わって以降半年間の思い考えていたことを整理・再構築する良い機会になった。ご迷惑もおかけしたが、マガジンとしても今までとは毛色の違う内容になったと自負している。(M1 合田)